

仙台藩 歴代藩主の横顔 第12回 (最終回)

三代藩主 伊達慶邦

仙台市博物館 学芸企画室 中武敏彦



生い立ちと藩政

伊達慶邦は文政八年(一八二五)九月六日、一二代藩主斉義の次男として、側室山本氏(恒子)との間に仙台城で生まれました。天保八年(一八三七)、登米伊達家出身の一二代藩主斉邦の跡継ぎとなり、翌年に江戸で元服、將軍徳川家慶の一字を拝領して慶寿と名乗ります。天保一二年に斉邦が二五歳で亡くなると、一七歳で三代藩主となり、二年後に名を慶邦と改めました。

慶邦が藩主となったころの仙台藩は、天保の飢饉をはじめ、凶作や災害が相次ぎ、藩財政は窮乏していました。さらに幕府から命じられた蝦夷地(北海道)警備も、財政の重い負担となっていました。そのため慶邦はたびたび節約令を出し、特産物の専売政策をはかるなど財政再建に取り組みしました。

幕末の動向

慶邦の治世は幕末・維新という激動の時代と重なります。嘉永六年(一八五三)にアメリカのペリーが来航し開国を迫るなど、日本は欧米列強の脅威に晒されました。

大藩である仙台藩は奥羽の諸藩を指揮し、外国からの侵略に備えるべきとの認識を持っていた慶邦は、ペリー来航以前から海防問題に関心を寄せており、洋式軍艦である開成丸

の建造や西洋銃砲の訓練を奨励するなど、軍備の充実をはかりました。

また、開国をめぐって朝廷と幕府が対立し、国内の政治情勢が混乱すると、仙台藩は朝廷からも幕府からも、中央政局で一定の政治的役割を期待されました。

しかし、朝廷に忠誠を尽くし、幕府には信義を立てようとする慶邦は、対立する朝幕の間で板挟みとなり苦悩します。この頃慶邦は家臣に宛てた書状の中で、朝廷を立てれば幕府に差し障り、幕府に従えば朝廷の臣である道が立たないと、心情を述べています。また別の書状では、「徳川の世も遠からず」と予見し、中央政局には不介入の道を選びました。

戊辰戦争への道

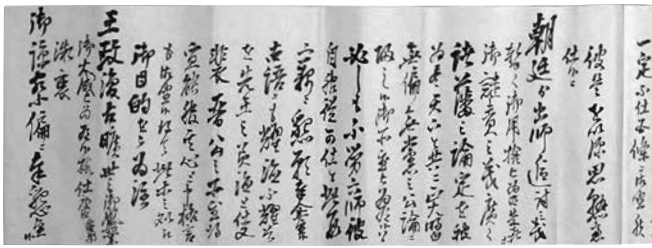
慶応四年(一八六八)一月三日、京都近郊の鳥羽・伏見で旧幕府勢力と、新政府側の薩摩・長州藩の軍勢が衝突しました。世にいう戊辰戦争の始まりです。この戦いに敗れた旧幕府側の会津藩は、朝廷を擁する新政府から「朝敵(朝廷の敵)」とされ、征討の対象となりました。

仙台藩は朝廷から会津藩征討を命じられる一方、会津藩からは、朝廷へのとりなしを依頼されます。慶邦は征討軍派遣の中止を求める建言書を作成したり、米沢藩とともに会津藩を謝罪させることで戦争回避の道を模索し

ました。しかし、あくまで会津藩を攻撃しようとする新政府軍の姿勢に、慶邦も対決を決意し、奥羽越列藩同盟を結成して新政府軍との戦争に突入します。

足かけ五ヶ月に渡る戦いに敗れた仙台藩は、明治元年(一八六八)九月一日に新政府軍に降伏を申し入れ、慶邦は東京で謹慎の身となりました。戦後処分で仙台藩は、いったん城地召し上げの沙汰を受けますが、改めて家名存続が認められ、仙台二八万石に封ぜられました。藩は慶邦の実子である三歳の亀三郎(後の宗基)を藩主に立て、隠居した慶邦は楽山と号しました。

明治二年九月に謹慎を解かれた慶邦は、明治六年に神社の教導職である中教正に任じられました。しかし病気のためほどなく辞し、明治七年(一八七四)七月一二日、東京で五〇年の生涯を終えました。



伊達慶邦建言書(部分)。新政府の征討軍派遣を批判し、朝敵の処置は「無偏無党の公論」で決めるべきと主張した(仙台市博物館蔵)。

※本稿では仙台市博物館の学術研究機関たる立場から歴史上の人物名に敬称を付していません。

次号からは新コーナー「古写真や絵画で見る仙台歴史散策」がスタートします。どうぞご期待ください。

旬の常設展 2018冬「仙台藩五代藩主・伊達吉村」ほか
12月4日(火)～3月10日(日)

季節によって内容が変わる仙台市博物館の常設展は、訪れるたびに新しい発見があります。冬の展示は「仙台藩中興の名君」と言われる五代藩主・伊達吉村の藩政に関わる資料や、絵が得意だった吉村が描いた絵画などを紹介します。また、2月3日(日)までの期間限定で、伊達政宗の曾祖父・伊達植宗(たねむね)の制定した分国法「塵芥集(重要文化財・村田本)」などを展示します。

【常設展観覧料】一般・大学生460円(360円)、高校生230円(180円)、小・中学生110円(90円)
※30名以上の団体は()内料金となります。このほか各種割引があります。詳しくはお問い合わせください。
※特別展は別途定めます。
【開館時間】9:00～16:45(入館は16:15まで)



重要文化財 塵芥集(村田本) 仙台市博物館蔵 展示期間:12/4～2/3



伊達吉村自画像(部分) 仙台市博物館蔵